

〈研究ノート〉『日本旅行案内』にみる立山 —西洋近代登山の成立とイギリス人の立山登山—

河野 史明

はじめに

江戸時代、立山は地獄・浄土の世界をこの世で体験できる山として全国的な信仰を集め、多くの人が登った。一方で西洋では、キリスト教が社会に浸透して以降、山は悪魔や竜が住むところとして人々から恐れ忌み嫌われる存在であった。しかし、ルネサンスや大航海時代の影響によって、少しずつ山の見方が変化し、山が持つ神秘性がはぎ取られていった。科学者や作家が調査・研究目的でアルプスを登り、その様子を記録し、表現していく中で、恐怖の対象であったアルプスが登山の目標となり、また観光旅行の行先の1つとなる時代がやってきた。こうした中、山へ登る行為自体に意義を見出すアルピニズムが西洋で誕生した。とりわけ、イギリス革命と産業革命を経て市民社会と資本主義経済が成立した1800年代のイギリスでは、多くの登山家が様々なルートで我先にとアルプスを登った。西洋で誕生したアルピニズムは、幕末から明治にかけて来日したイギリス人外交官、政府招聘学者や技術者、宣教師などを通して、日本にも広まっていった。

明治14年（1881）、駐日イギリス公使館の書記官だったアーネスト・メイスン・サトウ（1843～1929）とアルバート・ジョージ・シドニー・ホース（生年不詳～1897）は、自身らが旅した日本の都市や山岳地域の情報をまとめ、当時世界的に有名だったロンドンのマレー社のガイドブックを参考に、外国人向けの日本旅行ガイドブック『HANDBOOK FOR TRAVELLERS IN CENTRAL & NORTHERN JAPAN』（邦題：『中部・北部日本旅行案内』）を出版した。3版以降、執筆者を代え、『HANDBOOK FOR TRAVELLERS IN JAPAN』（邦題：『日本旅行案内』）の題で改訂増補をかさねながら9版まで出版されたこのガイドブックは、多くの訪日外国人が手にし、その情報をもとに日本各地を旅したとされる。立山についての記述も多くみられ、9版ある中で最も頁数が多い2版においては、立山について書かれた「ルート34越中から飛騨」をめぐるルートが25頁も割かれている⁽¹⁾。掲載された全64ルートの中で5番目に多いボリュームである。「越中と飛騨」より頁数の多いルートが東京や京都、大阪、東海道など明治初期の主要な都市や街道であったことを考えれば、ルート34の注目度がいかに高かったかが想像できる。ルート34では、北アルプスの標高、植生、生物、岩石などの分析とともに、旅の順路や宿泊先、見どころが記載されている。これらの情報はサトウやホースをはじめとするイギリス人たちが、地元の猟師などを雇い、その案内のもとに次々と高峰へ実際に登って得たものである。イギリス人たちは登山情報を交換しあい、成果を日本アジア協会⁽²⁾で発表し、そこでの情報をまとめ『日本旅行案内』が出版された。明治21年（1888）に初来日し、日本における近代登山⁽³⁾の父として位置付けられているウェストンも、この本の情報をもとに日本アルプスの高山を登っている。また、ウェストンは3版以降では資料提供者となり、出版に貢献している。

『日本旅行案内』の読者は外国人に限らず、日本人著述家や登山家にも影響を与えた。明治27年（1894）に『日本風景論』を刊行、「登山の氣風を興作すべし」と呼びかけた志賀重昂もその1人である。志賀自身は登山家ではなかったため、『日本風景論』における中部山岳地帯の案内は、主として『日本旅行案内』を下敷きとしている⁽⁴⁾。その後、志賀の著作によって登山に目覚めた小島鳥水が、明治38年（1905）に日本山岳会を設立したことを考えると、イギリス人の登山活動やその成果である『日本旅行案内』刊行は日本における近代登山の進展にとって、重要な出来事であった⁽⁵⁾。

本稿では、西洋において山の認識がどのように変化し、近代登山の成立に至ったかを考察し、『日本旅行案内』の記述を参考に、立山を訪れたイギリス人たちが何を見て、どう記録したかをまとめていく。外国と

立山の関係の黎明期を見ることで、今後、外国人から見た立山という視点で、立山の魅力を発信していく方法を考える際の一助としたい。

1. ヨーロッパにおける近代登山の成立

I 古代からルネサンス期における登山

1574年にスイスの歴史家ジョシアス・シムラーはアルプス登山を扱った『De Alpibus Commentarius』を著した。この本は、1904年に W.A.B. クーリッジによって『Josias Simler et les origines de l'Alpinisme jusqu'en 1600』⁽⁶⁾の中でラテン語からフランス語に翻訳され、近代以前のヨーロッパアルプスの歴史や自然について知ることができる1冊となっている。巻末には付録という形で、シムラーが様々な年代記、歴史書や修道院の記録などから、近代以前の登山に関する記述を抜粋したものが18編掲載されている。また、フランシス・グリブルの『The Early Mountaineers』⁽⁷⁾にも近代以前の登山についてまとめられている。両書から近代以前の登山を取り上げ、古代、中世、ルネサンス期の各時代における山の認識を確認し、その変化について考察していきたい。

古 代

第一に紀元前218年のカルタゴ将軍ハンニバルによるアルプス超えがある⁽⁸⁾。ハンニバルがローマを奇襲するべく大軍を率いてアルプスを越えたことは有名である。紀元前181年にはマケドニアのフィリップ王が現在のブルガリア共和国の首都ソフィアの近くにあるハエムス山を登った。フィリップ王は頂上から黒海、アドリア海、ドナウ川、アルプスを見ることができるとい話を聞き、ローマ人との戦争に役立つと考え登頂を試みた。3日かけて登頂したものの満足いく成果は得られなかった⁽⁹⁾。

古代ローマでは地理・歴史学者であるストラボンがエトナ山に登っている。ストラボンは紀元前63年から21年の間を生き、その間にシチリア島のエトナ火山へ登ったとされる。彼は古代ギリシアの哲学者エンペドクレスが火口に飛び込んだ際の青銅のサンダルが、頂上付近に残っているという伝説を確認すべくエトナ山へ登った。火口でエンペドクレスのサンダルを見つけることはできなかったが、ストラボンは火山の活動について分析・記録している⁽¹⁰⁾。126年から132年の間には、ローマ皇帝のハドリアヌスが領内を見渡すためにエトナ山に登り、そこで日の出を眺めた。また別の機会に、日の出を見て黙想するためにカシオス山へ登った際には、雨が降ってきて稲妻が落ちたと記録されている⁽¹¹⁾。カシオス山はトルコとシリアの間にある現在のジャベル・アクラ (Djebel Akra) ではないかと考えられる。362年ごろにはローマ皇帝のユリアヌス (位361~363) が同じくカシオス山を登ったが、記録には登ったということと山の形について簡単に書かれているにすぎない⁽¹²⁾。

395年にローマ帝国が東西に分裂し、帝国の北方の防備がおろそかになると、土地不足やアジア系遊牧民フン人の圧力によってゲルマン諸部族がローマ領内に侵入しはじめた。その中で、ゲルマン諸部族のうちの1つであるランゴバルドのアルポイン王が569年にイタリアのモンテ＝マジョーレに登っている。ランゴバルドはライン・エルベ両河の間に定住していたが、6世紀半ば過ぎに移動をはじめ、アルポイン王は多くの兵を率いてイタリアに達した後、モンテ＝マジョーレへ登った。頂上からの景色を眺め、山で出会った老人と野生の水牛について話したとされる⁽¹³⁾。

ストラボンのように学術的な関心を持っての登山もあるが、古代の登山のほとんどが為政者による軍事的なものであり、人々が積極的に登山を行ったという記録は見当たらない。

中 世

フランスのモン＝スニの麓にあるノヴァレーズ修道院の年代記には、1025年から1050年の間にイタリア

とフランスの境にあるロシュメロンに挑んだ記録されている。ローマの建国神話に登場するローマの建設者であるロムルスがロシュメロン山中に莫大な財宝を残したという話を聞き、それを得るためにどこかの伯爵が登ったが、頂上に近づくと上から石が投げつけられたという。その後、多くの聖職者を連れ、聖水や十字架を持ち山へ登ったが、結局登頂することはできなかったという⁽¹⁴⁾。1276年から1285年の間に、アラゴンのピエール3世がピレネーの山に登頂した際に、頂上で竜にあったと記録されている⁽¹⁵⁾。この部分については『山岳 第3巻 山の芸術』⁽¹⁶⁾に訳出されているので以下に引用する。

アラゴンのピエール3世は、悪評高い山の頂きへ行ってみようと思いつき、そのため2人の騎士を伴って出かけた。さて、既にかなり高いところまで登ったとき、まことにおそろしい雷鳴のような音を聞いた。とりわけ、稲妻と雷光が眼の前に光り、嵐が襲いかかった。王の2人の従者は勇気を失いはじめた。疲れ切って歩けなくなり、雷鳴におびやかされて息もたえだえになった。ピエールは、彼らにあくる日まで待っていてくれるように頼んだ。もしそれで戻ってこなかったら、山を下りて、好きなところへ行ってもいいといった。王はそれからたいそう難儀をして、ただ一人登りつづけた。そして山頂まで来たとき、まさにそこに湖をみつけた。彼は湖に石を投げた。

そうすると、巨大なおそろしいドラゴンが飛び出し、空中を息吹きて暗くおおいつつ、あちらこちらを飛びはじめた。その後ピエールは、従者といっしょになって下山した。

1290年頃にジェノヴァ司教の Jacobus de Voragine が書いた歴史書にも、スイスのルツェルン湖を見下ろすピラト山に住む悪霊の伝説が登場する⁽¹⁷⁾。長文のため、小泉武栄氏が『登山の誕生』⁽¹⁸⁾の中で行った要約を引用する。

イエスを捕らえた総督ピラト（ラテン語ではピラトゥス）は、ユダヤ人の世論に負けてイエスに死刑を宣告し、十字架にかけてしまう。その直後、ローマのティベリウス帝から使者がやって来て、皇帝が癩病にかかってしまったので、どんな病気でも治すという評判の医師を連れてこいとの命令を告げる。この医師とはイエスのことである。ピラトは当惑するが、どうしようもなく、処刑したことを隠そうとする。しかし使者はイエスの弟子のヴェロニカという婦人に出て真相を知り、ヴェロニカを伴ってローマに帰ることになった。ヴェロニカは、イエスの顔を映したという神聖な品「ヴェロニカのハンカチーフ」を持参し、それによって皇帝の病を治す。

病の癒えた皇帝はピラトを捕らえてローマに連行した。ピラトには考えられるかぎりの恥ずべき死を与えることになったが、これを聞いたピラトはナイフで喉を刺して死んでしまう。皇帝は呪われた男の死体をティベル川に投げ入れさせた。ところが悪霊たちがやって来てピラトの死体を川から取り出し、それを担いで空中を飛びまわったので、大地は震え、水は波打ち、激しい稲妻と雷鳴が起こった。

人々は不安におびえ、死体をティベル川から引き上げて、ロッテンという別の川に投げ込んだ。しかしここでも同じことが起こったため、死体を川から出し、ローゼンというところに送り、土の中に死体を埋めることにした。だが、ここにも悪霊たちが押し寄せ、土を掘って荒らす始末。ローゼンの人びとはやむをえず、そこから40時間ほどかかる高い山の上に運び上げた。

そこはルツェルンの背後の山で、この山の岩峰の下には小さな沼があり、死体はそこに投げ込まれた。ピラトはここで悪霊となった。そしてときどき沼から脱け出せば、身の毛もよだつ妖怪となって草原を駆け抜け、牧人たちを驚かせて牧場から追い出したり、家畜を蹴散らして崖下に落としたりした。またしばしば恐ろしい嵐を起こし、畑や牧草地を水びだしにしたり、家や人間を押し流したりした。

中世のヨーロッパでは、山は悪魔や怪物の巣窟で、モン＝ブランにおいても、煉獄にいる魂が氷河のクレヴァスの中に積み重なっており、嵐や土砂崩れ、雪崩の責任も山に住む怪物や竜の仕業とされた⁽¹⁹⁾。山に登ること自体を楽しんだという記述は見られず、キリスト教が浸透した影響で、修道士の登山や登山中の迷信的、神秘的な出来事が記録されている。

ルネサンス

11世紀末から始まった十字軍の遠征やイベリア半島におけるレコンキスタ（国土回復運動）で、イスラームとの接触が増えた12世紀の西ヨーロッパでは、イスラーム世界から流入した本が大量にアラビア語からラテン語へ翻訳されるようになった。イスラーム固有の学問や、イスラーム世界においてアラビア語で保存されていたギリシアの古典文化が流入し、その刺激をうけて学問や芸術が開花し、各地に大学が設立された。14世紀に入ると、北イタリアの諸都市は東方との貿易や金融業によって経済力をもち、それを背景に北イタリアでルネサンスが始まる。ルネサンスの時期や概念は多様に解釈され、具体的にいつの何をもって始まったと論ずるのは困難である。ここでは、北イタリア諸都市が繁栄した14世紀からイタリアルネサンスが衰退し西ヨーロッパ諸国へ広がりを見せた16世紀にかけての時期をルネサンスとし、山に関する記録をシムラーやグリブルの著作から取り上げる。

1336年4月26日にイタリアの詩人でルネサンス的人間の先駆とされるペトラルカがフランス南部にあるヴァントゥ山に登った。途中、昔この山に登ったことがあるという年老いた羊飼いに会い、登っても疲れて後悔が残るだけで、岩やいばらで体や衣服がずたずたになってしまうからやめたほうがいいと話をされたが、そのまま登り続け、頂上に達した。ローヌ川の谷が見え、ペトラルカは周りを見回して、広々とした下界の眺望に感動し、茫然と立ち尽くした。遠くにあるはずのアルプスの山々やマルセイユの海が見えることにも驚いた。自然や風景に感動している一方で、登山の最中に人間の生死の問題や聖アウグスティヌスのこと、魂の偉大さについて考えており、宗教的な側面も見せている⁽²⁰⁾。

1492年にはアントアーヌ・ド・ヴィルらがシャルル8世の命を受け、頂上に聖母マリアの祠を建てるため、フランスのモン・テギューを登頂し、梯子を用いて岩壁をよじ登ったと記録されている⁽²¹⁾。1511年にはレオナルド・ダ・ヴィンチが Monte-Bô に登った。山から流れる川や、みぞれを観察・記録している⁽²²⁾。チューリッヒの医師、古典文献学者にして博物学者のコンラート・ゲスナー（1516～1565）は、1555年にスイスのピラト山に登って森、谷、川、泉、草地を観察し、その景色のすばらしさについて述べている⁽²³⁾。

ルネサンスにおける登山は中世のようにキリスト教の影響を受けたものから、ペトラルカのように中世とルネサンスの両方の特色を感じさせるもの、ダヴィンチやゲスナーのように調査研究のために登ったものまで様々である。山を含む自然へのまなざしが、中世から少しずつ変化していったことは、先述した十字軍の遠征に伴うイスラーム学問からの影響はもちろんのこと、15世紀以降のオスマン＝トルコの勢力拡大から逃れ、ビザンツ帝国の学者や聖職者が西ヨーロッパへ移住してきたことも大きな要因である。貴重なギリシア語の文献をたずさえ、ローマ教皇庁やイタリア諸都市の有力者の庇護をたのんで移住してきたことで、ギリシア・ローマの古典文献が大量に流入した。これまでアラビア語からの翻訳を通じて知るにとどまっていた古典ギリシアの学芸を直接原典で学ぶことが可能になり、翻訳されたアリストテレスの『動物誌』やテオフラストスの『植物誌』などは人々の目を自然へ向けたとされる⁽²⁴⁾。ゲスナーもアリストテレスとテオフラストスなどの古典に親しみ、ルネサンス期を代表する博物学者となった人物である。

II 17世紀以降の登山

15世紀末の新大陸の「発見」によって、ヨーロッパ人の活動は全世界に向けて拡大することになった。彼らは世界各地に探検航海を行い、南米やインド、中国、日本、東南アジア、アフリカなどから民族や自然、文化に関する膨大な資料を持ち帰った。そうした資料の蓄積やルネサンス期に古典ギリシアの学芸が盛んに学ばれたことは、17世紀から18世紀にかけて、ヨーロッパに博物学ブームをもたらした。博物学は、地球上の生物の分布や生態、鉱物や化石、自然景観や地質、地形の成り立ちなどを研究する学問であり、当時最先端の学問分野として社会における人気も極めて高かった。博物学が盛んになるにつれ、地質学者や植物学者が争ってアルプスの調査・研究をはじめ、文学でも山の美しい景観を描写した作品が誕生した。

科学者たちのアルプス調査

ヨハン・ヤーコブ・ショイヒツァー（1672～1733）は山の自然を調べるため、アルプスへの旅を繰り返して行き、スイスのほぼ全域を歩き回り、アルプスの地図を作成した。また山の植物や動物を観察し、氷河の運動に注目した最初の人物である⁽²⁵⁾。ショイヒツァーは若いころは医師になるための教育を受けたが、途中で化石や植物に関心をもち、研究にのめりこんだ。高度の測定のほか、動植物の分布調査、気象観測、氷河と雪崩の観察を行ない、化石も採集し、1706年にスイスの自然史についてまとめた『Beschreibung der Natur-Geschichten des Schweizerlands』⁽²⁶⁾を刊行した。ただし、彼は中世から近代科学確立に至る過渡期の科学者だけに、悪霊の存在は信じていないものの、竜については実在すると考えていたらしく、彼の著作には竜や蛇のような生き物が載っている⁽²⁷⁾。

1744年にはピーター・マーテルが、サヴォイ氷河をイギリスにいる友人に向けて報告した2通の書簡に脚註を付し、銅版地図・図版を加えて『An account of the glaciers or ice Alps in Savoy』⁽²⁸⁾を出版した。著者マーテルについては詳しいことはわからないが、アルプス最高峰のモンブランがはっきりと登場する初めての書物とされる⁽²⁹⁾。スイス出身のオラス・ベネディクト・ド・ソシュール（1740～1799）は計7回の旅と氷河についての学術的観測を『Voyages dans les Alpes』⁽³⁰⁾にまとめた。ソシュール自身は1787年にモンブランを登頂しており、これはモンブランの第二登とされている⁽³¹⁾。

1843年にはスコットランド出身でエジンバラ大学教授のジェームス・デビッド・フォーブス（1809～1868）がサヴォイ地方のアルプス（シャモニ付近）を旅行した際の見聞についてまとめ、『Travels through the Alps of Savoy and other parts of the pennine Chain』⁽³²⁾を出版した。本では氷河の現象を科学的に分析・著述している。

アルプスを賛美した文学者たち

科学者たちがアルプスの調査を進める中で、山へ関心を持ち、登る人は増加していった。しかし、研究目的の登山は、散発的、断続的に行われたにすぎず、社会に大きな登山の流れをもたらしたものではなかった。一般に広く山の魅力を発信したのは作家たちであった。アルプスの景色を求め、観光目的で多くの人々がスイスを訪れるようになるのは、19世紀になってからであるが、16世紀より英国貴族たちは、スイスを訪れアルプスを見ていた。英国貴族の子弟は、国際人としての教養を身につけるため、グランドツアーと称し、数年以上をかけてヨーロッパ大陸をめぐる大旅行を行っていた⁽³³⁾。主な目的地は先進国のドイツやオランダ、美術と文芸の発達しているフランスとイタリアが最も重要な必須の訪問国であり、スイスはイタリアへ向かうときに、やむをえず通過する交通上の通り道であった⁽³⁴⁾。スイスで山を鑑賞しようとする発想は見られず、イタリアへ着くために通らざるをえなかった不便で恐ろしい山越えに過ぎなかった。英国人旅行者たちは、スイスで山越えをしたときの不快感をしばしば書き残している。「奇妙でとんでもなく恐ろしい岩だらけの山道を登った」⁽³⁵⁾、「不格好な岩や、普通じゃない住民たち。もう二度と見なくて済むことを願う次第」⁽³⁶⁾など17世紀から18世紀前までの記録には、スイスの山に対する不快感が綴られている。

18世紀半ば以降にヨーロッパで「崇高」美の概念が流行すると、スイスに所縁のある著名人がアルプスを訪れ、その景観について親しみをもって記述し発信するようになっていく。崇高とは、畏怖を伴うことによって感じる美であり、たとえば断崖絶壁、洞窟、溪谷、氷山、切り立った岩や山、火山の噴火、滝や荒天の海など、人間の力ではとうてい及ばぬ事物・事象や景観に対して美を見る感性である⁽³⁷⁾。スイスの詩人アルブレヒト・フォン・ハラール（1708～1777）は1729年に詩集『アルプス Die Alpen』を執筆し、アルプスの自然を賛美し、未だ文明に毒されていない自然の最後の避難所こそが山の世界とし、山の美しさと山里に住む素朴な人々を一種のユートピア（理想郷）として紹介している⁽³⁸⁾。この著作は何ヶ国語にも翻訳され、山への認識に大きな影響を与えたとされる。さらに、ジュネーヴ生まれのジャン・ジャック・ルソー（1712～1778）は、1761年に『エロイズ』の中で、アルプスの風景や生活を賛美し、小説の舞台となっ

た地域は、小説の広まりと共に、外国人旅行者にとって人気の滞在地となっていた。スイスにおけるルソー所縁の土地は、どこもグランドツアー中の英国人にとってスイス旅行中に訪れるべき場所となり、イギリスで発行されたスイス旅行ガイドブックには、必ずルソーと関わりのある町々が取り上げられた。

クックの団体旅行とウィンパーのマッターホルン登頂

科学者たちの登山や山を賛美する文学作品が広まりをみせ、19世紀に入るとアルプスがイギリスの人々にとって流行の土地となり、山麓をトレッキングしたり、氷河を見学したりすることがスイス旅行の定番となっていた。英国の鉱物学者ジョン・マーレー（1786頃～1851）は1829年に出版した『スイスの美と崇高のまなざし』で、当時のイギリスの人々にとって崇高美の代表格である氷河を訪ねることが最大の関心ごととなっているとしている。19世紀半ばを過ぎると、産業革命によって経済的に豊かとなった市民が、余暇活動を充実させるべく、アルプス観光に訪れた。1863年にはトーマス・クック（1808～1892）が団体でのスイス旅行を実施した。クックは世界で最初の旅行代理店の創始者といわれており、130名を引率し、1863年6月26日ロンドンを出発した。パリを経由し、28日にスイスに入り、各地を回った⁽³⁹⁾。クックのスイスツアーから5年後の1868年、ヴィクトリア女王（位1837～1901）がスイスに旅行し、馬でピラトゥス山にも登っている。女王のスイス旅行は、イギリス人のスイス旅行熱に拍車をかけた。

多くのイギリス人がスイスへ訪れる中で、アルプスの未踏峰の征服をもくろむ登山家が現れた。彼らは地元の猟師などにガイドを依頼して、次々に4000メートル級の巨峰に挑み、10年ほどの間に主要なピークはほとんど陥落された。1854年のアルフレッド・ウィルスによるヴェッターホルンの初登頂から1865年のイギリスのウィンパーらによるマッターホルンの初登頂までの12年間をアルプス登山の黄金時代または「金の時代」と呼ばれている⁽⁴⁰⁾。また、その間の1857年には、イギリスで最古の山岳会であるアルパイン・クラブが誕生している。ウィンパーが自身のマッターホルン登頂と下山中に起きた悲劇を記録した『アルプス登攀記』は優れた登山記として現在も読み継がれている。

中世の時代に、悪魔や竜の棲み処とされ、恐れられたヨーロッパの山々は、ルネサンス期以降の調査、研究のための登山や、博物学の隆盛、文学者たちが作品中で山の自然美を讃えたことにより、観光そして踏破する存在へと変化していった。イギリスではこの傾向はより顕著で、ヴィクトリア期に増大した中産階級は喧噪とした都市を一時的に忘れさせてくれるアルプスの山へ向かった。山は恐れる存在ではなく、科学的調査、研究のフィールドかつ自然を感じるレクリエーションの場と考えるイギリス人たちは、19世紀半ばの自由貿易帝国主義の傘下におさめるべく向かった幕末の日本でも同様の関心を持って山岳へ向かった。

2. イギリス人、日本の山へ

嘉永7年（1854）、徳川幕府は鎖国政策を転換し開国に踏み切り、アメリカと和親条約を結んだ。同年にイギリス、55年にロシア、56年にオランダと同様の条約を結んでいる。58年には、これらにフランスを加えた5カ国と修好通商条約を結び、近代的外交、通商関係に入ったことで、日本の山岳に外国人の足跡が及ぶ状況が生じた。

外国人による日本国内での最初の登山は、初代イギリス公使ラザフォード・オールコック（1809～1897）ら8名による富士山登頂である。オールコックは、日本滞在中の経験をもとにした自身の著作『The capital of the Tycoon』⁽⁴¹⁾（大君の都）で富士登山について詳細に記している。

万延元年（1860）9月4日、オールコックは富士登山のために神奈川のイギリス領事館を出発した。富士登山の目的は、「外交使節団は首都に居住し、かつ日本国内のどこでも自由に旅行する権利が保証されている。」という条約の規定を自らが実行することに加え、外国との新たな関係に対する怒りや、外国人に対する敵意というものが政治の中心から離れたところで存在しているのか確かめるといったものだった⁽⁴²⁾。

幕府は、国内が不安定であること、江戸から離れると危険であること、季節が遅すぎること、下層階級しか行かぬ巡礼にイギリス公使が出かけるのはふさわしくないこと、さらには山が裂けて登山者を飲み込んでしまうというような奇想天外な理由で延期や取りやめを求めた。しかし、これらの理由は条約を楯にとる各国の要求の前では効果はなかった。

登山隊はオールコックをはじめとするイギリス人8名、日本側からは副奉行1名、役人3名、目付1名、そしてその家来衆を含めて、30頭以上の馬と100人ほどの行列となった。大行列は東海道を進み、5泊を重ねて村山口（富士宮市）へ着いた。珍しい外国人の行列に見物に飛び出してきた群衆は「シタニリヨ（下におろう）」の一声で土下座させられてしまう⁽⁴³⁾。村山口で、案内役の3名と、ポーターとして数名の強力が一行に加わった。山頂手前の山小屋では、夜の寒さと蚤に苦しめられたと記録している。頂上では、イギリス国旗を掲揚し、オールコックのピストル5発に続き、全員交互に計21発の礼砲を頂上火口に向けて撃った。イギリス女王万歳を三唱して国歌を斉唱、最後はシャンパンで乾杯した。一行は諸種の観測ののち頂上付近に泊まり、翌日下山、熱海に向かった。この富士登山は単なる物見遊山ではなく、国内の情勢や自然環境などの調査も目的としており、登山メンバーの中には、植物学者や観測担当の軍人が含まれていた。彼らは道中や富士山中における植物の植生調査や山頂の溶岩や砂礫の採取、標高や温度など様々な観測活動を行っている。

オールコックの富士山登頂に、日本の庶民らは、至高の霊峰と仰ぐ山を異教の徒が穢したと拒絶反応を示した。当時のかわら版では、黒船に乗った天狗が風雨で異国人を吹き落としている様子が描かれ、霊山富士に異国人が登ったために神の怒りに触れたという内容で伝えられた。かわら版の文末は「いじん登山すべからずはやく下さんいたすべしと御こへ有し」と結ばれている⁽⁴⁴⁾。しかし、その後も外交官らによる富士登山旅行は続き、慶応3年（1867）には2代目のイギリス公使ハリー・スミス・パークス（1828～1885）が夫人とともに富士山に登り、雪に覆われた頂上に達している。パークス夫人は外国夫人として初の富士登頂者となった⁽⁴⁵⁾。

パークス夫妻以後、外国人の富士登山は急増した。明治10年（1877）前後から、文明開化の指南役に招かれた外国人科学者や技術者たちによる登山活動が、日本各地の山岳地帯で見られる⁽⁴⁶⁾。彼らは職業上、山岳を調査、研究や観測の対象とし、高山植物、地形、地質、鉱物資源や火山、地震の調査、標高の測定や気象、天文の観測のため山に登り川を遡った。日本の山岳を欧米人研究者や技術者の眼で捉えた成果は、報告、研究論文、著作として発表された。日本人の官吏や学生らも同行し、その知識や技術の習得に努め、山岳は科学の対象、研究の場として見直されていった。

3. サトウとホースの『日本旅行案内』

明治5年（1872）、在日外国人たちが日本研究を交流・蓄積する「日本アジア協会」を横浜に設立した。イギリス公使館のサトウとホースは、会員や自らの日本行脚と研究を集成し、来日・在日外国人のためのガイドブックとして『日本旅行案内』を出版した。本章ではガイドブックが盛んに出版された時代背景と、『日本旅行案内』の編集者たち、立山を取り上げた「ルート34 越中と飛騨」の部分を詳しく見ていきたい。

I 増大する旅行者

西洋では、19世紀は旅行と旅行記の世紀といってもよいほど特徴をもった時代であり、イギリスでは1840年までには約10万人が物見遊山に大陸へ渡ったとされる⁽⁴⁷⁾。1836年には、マレー社の旅行ハンドブックの最初の巻（『ヨーロッパ大陸旅行案内』）がロンドンで出版され、以後80年間にわたってマレー社は様々な国や地域のガイドブックを刊行している。また1867年には汽船による太平洋横断の定期航路が開設され、1869年にはアメリカ大陸横断鉄道が完成、同年末にはスエズ運河が開通するなど、1870年代には、世界旅

行は飛躍的に便利になり、冒険家や特別の人ばかりでなく、一般の人も格段に容易に世界を旅行できるようになった⁽⁴⁸⁾。1872年に連載されたジュール・ヴェルヌの空想小説『八十日間世界一周』もこの時代背景を反映している。この小説はスエズ運河開通のニュース記事とクック社のパンフレットにヒントを得て書かれ、1874年には舞台化された。日本でもこの小説は翻訳出版された⁽⁴⁹⁾。この小説には横浜が寄港地として登場しているように、現実でも1867年に太平洋郵船がサンフランシスコー香港間の定期航路を開設し、その経由地に横浜が入ったことにより、旅行者たちは横浜を訪れていた。1870年に書かれたウィリアム・エリオット・グリフィス（1843～1928）は『皇国』の中で、横浜に多くの旅行者が訪れていることを記している⁽⁵⁰⁾。

旅行熱に拍車をかけた要因として、1851年のロンドン博覧会をはじめ19世紀の後半に欧米各地で開かれた万国博覧会があげられる。もともとは自由貿易を先導するイギリスが、自国の産物や最新の技術を誇示する場であったが、そこを訪れた人々は、未知の世界、はるか遠い異国の物品や人々に出会う機会を得た⁽⁵¹⁾。19世紀後半の西洋世界のジャポニズム（日本文化愛好）の流れに博覧会は大きな影響を与え、旅行者のなかには、こうした風潮のなかで日本に憧れ、日本旅行へ出かけた人もいたとされる。

しかし、明治初期の日本では、外国人旅行者や居留民が自由に国内を旅行することは難しかった。安政5年（1858）の日米修好通商条約をはじめする欧米諸国との通商条約により、自由に行くことができる範囲は遊歩区域内に限られており、その範囲を超えて旅行することを内地旅行といった⁽⁵²⁾。ただし、外交官に関しては内地旅行の制限を受けず、公使・領事は職務の遂行のため日本国内を旅行する権限が条約で認められていた。遊歩区域外、日本国内を自由に旅行したいという外国人の内地解放の要求に日本政府は種々の旅行免状（パスポート）を発給することで対応していった⁽⁵³⁾。明治8年（1875）6月、外国人旅行免状を外務省から発行することが決定し、一般外国人の旅行許可書はこれに一本化された。明治13年（1880）には居留地に住む欧米人1,852人に対して、1,155通の免状が付与されている⁽⁵⁴⁾。あくまで免状の付与数であり、実際に旅行へ赴いたかは定かではないが、かなりの割合で発行されている。内地旅行は実質的に少しずつ緩和される方向にあったが、名実ともに許可されたのは明治32年（1899）の条約改正による。これ以後、すべての外国人が日本国内を自由に旅行することが可能になった。外国人旅行者は日本国内を旅行する中で見聞きしたものを旅行記や紀行文のかたちで残していった。また内地旅行が活発になるにつれ旅行ガイドブックの必要性が高まっていった。旅行ガイドブックは1780～1870年の間に確立しており、特にマレー社の旅行ハンドブックはシリーズ化されており、1836年の大陸旅行者のためのハンドブック（オランダ、ベルギー、ドイツ北部を対象）を皮切りに、1838年のスイス案内、1839年の北欧案内（デンマーク、ノルウェー、スウェーデン）、1843年のイタリア案内、1847年のエジプト案内などが刊行されていた⁽⁵⁵⁾。サトウはマレーのガイドブックの日本版を作ることを目指し、明治12年（1879）に友人に宛てた手紙の中で、これから作成する日本のガイドブックをマレーのシリーズに組み込んでほしいという気持ちを記している⁽⁵⁶⁾。結果として、明治14年（1881）に完成した『中部・北部日本旅行案内』は横浜のケリー社から出版され、サトウとホースによる自費出版であったが、2版以降はマレーのシリーズとして出版されたため、のちに1881年に出版されたものが『日本旅行案内』初版となった。

Ⅱ 『日本旅行案内』

① 全体の構成

『日本旅行案内』はハンドブックという書名が付けられ、B6版という携帯に便利な大きさである。しかし9版までの平均で560頁に及ぶ厚手の本となっており、各頁には8ポイント相当の小さな活字が二段組でぎっしり詰め込まれている。1冊に詰め込まれている情報は膨大である。9版までを通して、「序文」「序論」「案内」から構成されている。版によって内容は異なるが、「序文」には作成に当たって協力や情報提供を受けた人物の名前が記されている。「序論」は日本に旅行へ行くときにあらかじめ頭の中に入れておくべき情報やサトウなど当時の日本学研究的の第一人者たちの研究成果が項目ごとに記されている。「案内」に関して

は各地の地理的案内にとどまらず当該区域の歴史と伝説や民話を豊かに加えて自然と人文の両面から地域を分析した地誌となっている。サトウをはじめとする外交官や政府招聘外国人たちが実際に各地を旅して得た情報が編集されている。初版から9版までの刊行年、総頁数、序論頁数（項目数）、案内頁数は下表の通りである。

【表 1】各版の刊行年および頁数

版次	刊行年	総頁数	序論頁数（項目数）	案内頁数
初版	明治14年（1881）	510	21（15）	489
2版	明治17年（1884）	705	119（24）	586
3版	明治24年（1891）	459	50（27）	409
4版	明治27年（1894）	528	72（29）	456
5版	明治32年（1899）	577	92（29）	485
6版	明治34年（1901）	579	92（28）	487
7版	明治36年（1903）	586	92（28）	494
8版	明治40年（1907）	570	91（28）	479
9版	大正2年（1913）	555	95（28）	460

初版と2版はサトウとホースによって、3版以降はバジル・ホール・チェンバレン（1850～1935）とウィリアム・ベンジャミン・メイソン（1853～1923）の編集となっている。2版の完成を前にサトウとホースは離日しており、その後の編集をチェンバレンとメイソンが引き継いでいる。表1で3版から総頁数が激減している理由として、3版の編集者であるチェンバレンが明治24年（1891）に『日本事物誌』を出版していることがあげられる。『日本事物誌』は日本に関する社会、経済、歴史、言語、伝統、宗教、芸術などの広範囲にわたる事項を百科全書的にまとめあげたものであり、『日本旅行案内』の2版（1884年刊）まで「序論」にあった「動物」「植物」「絵画」「彫刻」「地理」の5項目は『日本事物誌』の中に転載されている。旅行に直接必要と思われる項目は『日本旅行案内』に、各項目についての専門的な知識は『日本事物誌』へという編集方針がとられている。

② ルート34の全体像と立山に関する部分

『日本旅行案内』において立山は「ROUTE34 Etchiū and Hida」の中で紹介されている。9版の中で最も立山についての記述が多い2版のルート34の立山（富山）に関する箇所は下表の通りである。

【表 2】ルート34の見出しと主な情報提供者

見出し（ページ）	主な情報提供者
概 説 (311～312)	ガウランド、ミルン、サトウ
大町から針の木峠を越えて富山へ (313～315)	サトウ、ホース
立 山 (316～318)	アトキンソン、ディクソン
富山から宮川溪谷を経て高山へ (318～319)	サトウ、ホース
富山から高原川溪谷を経て高山へ (319～320)	サトウ、ホース
土村から秘境有峰 (320～321)	マーシャル、ダイヴァース

概説には、越中から飛騨にかけては日本で有数の山々が連なる山岳地帯であり、「日本のアルプス」(Japanese Alps)と称してもよいと書かれている⁽⁵⁷⁾。越中から飛騨にある高山で注目される山として、「Tate-yama」(立山)、「Goroku-take」(五六岳)、「Yari-ga-take」(槍ヶ岳)、「Norikura」(乗鞍)があげられ、立山の標高は9,500フィート(2,896メートル)としている(9版では2,996メートルとなっている)。山脈の地質学的組成や植生、動物相も紹介されている。具体的なルートに関しては、越中と飛騨のエリアにおける、出発地点と到着地点、距離、宿泊施設、見どころが複数提示してある。

「大町から針の木峠を越えて富山へ」では長野県大町市から針の木峠を越えて富山へ向うコースが紹介されている。針の木峠を越え越中へ至る道は、明治9年(1876)から明治10年(1877)にかけて完成した「Shindō (New Road)」を利用し、一人当たり5銭、荷物持ちの人夫は7銭を払うと通行可能と書かれている⁽⁵⁸⁾。道順に加えて、各山岳の様相(標高や植生、地質の分析)が随所に書かれており、越中に入ってから、黒部の小屋で宿泊が可能であること、ザラ峠、立山温泉、芦峯、小見、上滝、富山への道や各地の宿泊施設に関する記述がみられる。

「立山」では、芦峯寺での宿泊先、立山開山の祖を祀った神社の話、芦峯寺から立山への登山道、材木坂の伝説、地獄谷の様相、山頂から一望できる各地の山々について記述されている。

「富山から宮川溪谷を経て高山へ」と「富山から高原川溪谷を経て高山へ」では、富山から高山への道が2つあり、それぞれ趣のちがう景色を楽しめるとしている。両ルートともに風景や宿泊地について書かれており、神通川にかかる「kago-no-watashi」(籠の渡し)については詳細に記述されている。

「土村から秘境有峰」は他と比べ文章量は少ないが、サトウが聞いた有峰の集落に関する噂と、実際に訪れたマーシャルとダイヴァースが見た様子が書かれている。

③ 立山を訪れたイギリス人

サトウがルート34を執筆するにあたって情報提供を受けた人物の略歴と、旅の記録や論文から立山がどのように記述されているかを確認していく。

アーネスト・サトウとA・G・S・ホース

〈サトウ略歴〉

アーネスト・メイスン・サトウは1843年6月30日にロンドンで生まれ、ユニヴァーシティ・カレッジ在学中にイギリス外務省の通訳生試験に合格し、文久2年(1862)に初めて日本を訪れた。イギリス公使館付通訳生、通訳官、日本語書記官へと昇進し、日本語を自在に駆使して討幕派のみならず幕府側とも交流するなど、イギリス公使館にとって不可欠な外交官となった。明治2年(1869)2月に恩賜帰国をするまでの約6年半日本に滞在し、幕藩体制が崩壊し明治政府が樹立される近代日本の姿を目撃した。明治3年(1870)11月、約1年8ヵ月ぶりに日本に帰任し、外国人として初めて伊勢神宮に参拝するなど日本各地を旅行し、言語、考古、歴史、民俗、地理、宗教に関する論文や旅行案内など数多くの著作を日本アジア協会を中心に発表し、日本研究の第一人者となった。明治17年(1884)バンコク(シヤム)総領事に転出、85年には公使に任命された。1889年モンテヴィデオ(ウルグアイ)、1893年タンジール(モロッコ)の公使をへて、日清戦争後の明治28年(1895)5月、日英関係強化のため日本公使に任命され、同年7月、12年ぶりに日本に赴任した。その後極東情勢の急転により1900年8月駐清公使に任命され、義和団事件の事後処理にあたった。1906年5月清国での任務を終えたサトウは日本経由でイギリスに帰国、45年におよぶ外交官生活から引退した。帰国後はオタリー・セント・メリーに隠居し、1929年8月26日86歳で亡くなった⁽⁵⁹⁾。

〈ホース略歴〉

アルバート・ジョージ・シドニー・ホースの出生について詳しいことはわからない。サトウの『外交官の

見た明治維新』⁽⁶⁰⁾には、慶応元年（1865）に英、米、仏、蘭の四国艦隊が兵庫に遠征した際、英国の旗艦プリンセス・ローヤル号上でホースにあったと書いてあり、このころは英国東洋艦隊に所属していたとみられ、サトウとはそれ以前から親交があったようである。慶応3年（1867）には横浜で「横浜周辺外国人遊歩区域図」を作成しており、図中の「REFERENCE」には慶応2年（1866）に神奈川県を騎馬で周遊したと書かれていることから、このころホースは横浜周辺にいたと考えられる。『佐賀藩海軍史』⁽⁶¹⁾には明治元年（1868）に佐賀藩士に砲術を教授していた写真が「明治元年長崎砲術伝習員及教師英人ホース氏」というタイトルで掲載されている。明治5年（1872）からは築地の海軍兵学寮勤務、明治11年（1878）には海軍省の英語・数学教師となった。明治17年（1884）に海軍省を退職し、1885年ナイアサ領事、1889年タヒチ島領事、1894年ハワイ国ホノルル府駐在総領事となり、1897年にホノルルで亡くなった。

〈サトウとホースが見た立山〉

サトウとホースは越中と飛騨へ向け、明治11年（1878）7月17日に東京を出発した。この旅行の記録をサトウは日記に残しており、イギリスの国立公文書館にサトウ文書として保存されている。ここでは昭和53年（1978）刊行の『富山県史だより3』に所収されている、福沢都茂子訳の「英国公使館書記官アーネスト・サトウの立山登山日記—「アーネスト・サトウの日記」—より」⁽⁶²⁾と庄田元男訳の『日本旅行日記1』⁽⁶³⁾を参考に、サトウとホースの立山での行程をまとめ、立山や富山に関する記述を抜粋していく。

【行程】

東京を出発し、鴻巣—安中—碓氷峠—軽井沢—小諸—上田—田沢—池田—大町と進み、7月22日野口に宿泊。

〔7月23日〕野口—針の木峠—黒部川—平の小屋

〔7月24日〕平の小屋—ヌクイ峠（荊安峠）—千草峠（ザラ峠）—立山下（立山温泉）

〔7月25日〕立山下—松尾峠—室堂—地獄谷—室堂

〔7月26日〕室堂—鏡石—姥石—桑谷平—材木坂—芦峯寺（等覚坊・佐伯正範宅泊）

〔7月27日〕芦峯寺（休養日）

〔7月28日〕芦峯寺—シナキ（千垣）—岩峯寺—上滝—福沢—二本松—牛ヶ増—町長—薄波—吉野

吉野を出発し、猪谷—船津—大坂峠—高山—黍生谷—野麦—日和田—西野—木曾福島—御嶽—木曾福島—松本—和田—軽井沢—熊谷を経て、東京に8月13日に帰着。

【立山や富山に関する記述】

新湯「直径40ヤード（※36.58m）のこの池の側面は急にゆるやかな勾配になって、青緑の水をたたえている。中心では泡を噴き、蒸気や硫黄臭い臭気を発している。指の先をちょっと突っ込むだけでも熱い。男が二人、池の縁でいわゆる「硫黄の花」—すなわち水に沈殿した硫黄—を捜していた。宿の主人の話によると、この池は1858年2月25日の大地震まではただの真水の池であったそうである。」

立山温泉「おおやけには有峰として知られている温泉があり、深見六郎が経営している。彼はそこを立山下の温泉—リュウザンはすなわちタテヤマのこと—ともよんでいる。出湯は、華氏124度で多量に湧き出ている、入浴者のために冷水を混ぜている。それは冷たいものも熱いものもあり、味は全くない。」

安政の大地震「地震の際に、山の大部分が谷に真向いにくずれ落ちて、川（真川・湯川）をすっかりせき止めた。1ヶ月後雪が解けると、水は鉄砲水となってその障壁をつきやぶり、下方の部落は泥の海となった。」

有峰「宿の主人（立山温泉）が有峰のことを話してくれた。彼らは平家の子孫で、血族結婚をする奇妙な氏族である。11軒だけが残っており、それぞれ3、4つの所帯からなっていて、お金を持つことは絶対に許されない。容姿は互いによく似ていて、仲間うちだけしか話が通じない。」「（芦峯の宿の主人が）有峰には行かないようにと忠告してくれた。有峰へは、芦峯からミズシマまで3里。そこから一軒の家もない山道を8里登っていく。有峰の住人は「ひえ」と汁のかわりの塩水を食するだけだから、米、その他の食料品は持っ

ていかねばならない。12、3軒しか家がなく、それぞれに3、4つの所帯が住んでいる。彼らは血族結婚するが、身体の高さも知能も普通の人に劣ることはないそうだ。平家の落人の子孫であることは疑いないらしい。言葉は普通の日本語とはかなり異なり、ききなれた人でないと話が通じないそうだ。個人名も古めかしい。」

地獄谷「環状孔がたくさんあり、最大のもので直径20フィート（※ 6.096m）ぐらひはあり、地孔の中では熱湯と泥、硫黄を多量に含んだ水が猛々しく煮えたち、泡立っている。泥水と硫黄の地孔の一つで直径15フィート（※ 4.572m）ほどのが、力いっぱい空中に躍動している。大地にあいた深い割れ目の縁まで噴きだされたものが消え去り、またもとどおりになり、表面にいつまでも円形の波がたっている。別の黒い泥の噴水地が万物を圧倒するかのようにはりきっている姿は、滑稽にさえ思えた。しかし、それはいつも目的を達成することなくもとの溜池に落ちついた。深い地孔や割れ目から噴出する蒸気の音は耳をつんざくばかりであった。どの池も最高温度は華氏190度から180度で、硫黄の池はたった160度であった。そして、地孔の片端から流出している川の中に、温度が42度しかない温泉がブクブク湧いている。大きいものから直径2インチ（※ 5.08cm）ほどの小さいものまで、すべての地孔を数えるのは無理であろう。」

室堂「参拝人のためのこの小屋は、木造でとても風通しがよい。松材のたき火で暖をとるので、煙が目にしみて痛い。寝具はないし、食器やその他の用具もほとんどない。食物として手にはいるのは水米だけである。山はふつう7月20日から9月8日までの50日間は参拝人を近づける。今年はすでに100人の参拝者が登っていた。この地点からは、富山平野がよく見晴らせる。浄土山への道は右へ、主峰の権現堂へはまっすぐに登る。三番目に別山という山がある。」

鏡石「その石は道の右側にあり、表面が平らで直立した大きな石で、下部に像が刻まれている。」

姥石「姥石ーナース・ストーンーと呼ばれるもう一つの標識石のある地点に着いた。雨がふると水路となる道には大きな石がごろごろしていたが、この石は、そういう石がいっぱいある道の中央に立っていた。」

材木坂「ある婦人が、宮の開祖の切り倒した材木をまたいだため、材木がこれらの石に変えられたという伝説がある。」

芦峯寺と雄山神社「宮の神官の長の家に泊まった。その人は、以前は神仏混淆の仏教徒であったが、自分の利益を守るために神道に改宗した。彼は酒を出し、ディランやガウランドが数年前来た時に話してきかせたインギリス（イギリス）の首都ドンドル（ロンドン）の話をたくさんしてくれた。」「芦峯の佐伯マサノリ宅で一日休んだ。彼は立山開山の祖佐伯有頼を祀って701年に建立された御上の神社という宮の神官の長である。本殿あるいは祈願殿の後ろにある有頼の墳墓は、3フィート（※ 91.44cm）ほどの小丘で、上に常緑のシラカケが植えてあり、不揃いの石で8フィート（※ 2.4384m）四方が固められている。杉の老木の立派な森の中である。文武天皇を祀った大宮と、手力尾神を祀った若宮の2つの宮がある。有頼の父はこの近辺地域の領主で、鷹狩りが好きであった。彼の父が朝廷へ出かけて留守の間に有頼は、もし逃がしたら家に帰らないという条件で、父の気に入りの鷹を義母から借りた。そこで彼はここから25マイル（※ 40.2336km）北にあるカジカノに鷹狩りに出かけた。そしてその鷹を見失い現在岩峯寺の建っている場所まで追いつめていった。すると1匹の熊が現れ、鷹はその熊の姿におそれをなして戻ってこない。有頼が熊めがけて矢を放つと、熊も鷹も川の上流に逃げていった。彼が捜しに山に入っていくと、室堂の反対側のほら穴で鷹と熊が不動明王と阿弥陀如来になっているのを見た。そこで、彼はその地に3年3か月留まり、宮を建立した。彼の家臣も皆佐伯の姓を継いだ。その姓は芦峯寺に11軒、岩峯寺に37軒ある。以前はそれぞれの神社に対して50俵、家に対しては13俵ずつ寄進米が与えられていたし、その上、建物は藩の費用で建てられていたがこの寄進米は現在政府によって禁止されている。村には絵のように美しい茅葺きの民家がある。」

W・ガウランド(1842～1922)

〈ガウランド略歴〉

ウィリアム・ガウランドは1842年にイギリスのイングランド北東部にあるグラム州サンダーランドに生まれ、英国化学専門学校に入学、1868年には英国鉱山学校に転学し、科学及び冶金学を専攻した。明治5年（1872）に大阪造幣寮の化学と冶金の技師として招聘され来日した。貨幣鑄造技術の発展に貢献し、大阪陸軍砲兵工廠の顧問も務めた。日本各地の古墳の研究を重ね「日本考古学の父」と呼ばれる。本州中央部の山に登り、「日本アルプスの命名者」として知られる。明治21年（1888）に造幣局を満期解約しイギリスにもどり、1922年にロンドンの自宅で亡くなった。

〈ガウランドの立山登山〉

サトウは『日本旅行案内』初版の序文で、吉野と飛騨・信濃地区の山岳の地質と後者の主な高峰の詳細な情報について世話になったとガウランドの名前をあげている。しかし、ガウランド本人による登山記録は残されておらず、周囲の情報をもとに足跡を見ることしかできない。ガウランドの登山について窺い知ることができる資料として、①地震学者ジョン・ミルン（1850～1913）の論文「EBIDENCES OF THE GLACIAL PERIOD IN JAPAN」⁽⁶⁴⁾（日本における氷河期の遺跡）、②1895年12月9日の英国地学協会の例会におけるウェストンの論述「Exploration in the Japanese Alps, 1891-1894」についての検討会中のガウランドの発言⁽⁶⁵⁾、③サトウ日記の芦峯寺での記録、④「高山町旅行外国人宿泊関係文書（明治九年～同十七年）」がある。

①ジョン・ミルンの論文「EBIDENCES OF THE GLACIAL PERIOD IN JAPAN」

論文中でミルンは各地方の高山の標高とミルン自身を含めた外国人の登山実績を示している。その中の記述として、自身は越中南部から飛騨、信州の間に至る山脈を1回だけ旅したことがある程度で、詳細は知らないが、大阪のガウランド氏から山の高度表と岩石標本をもらいまとめることができたことと感謝を述べている。立山については「北緯36度35分。標高9500フィート。旧火山でその一部は溶岩状を呈している。ガウランド氏はこの山には特に雪が多いと言っている。その雪田は長さが半マイルも続き、万年雪となっている。」と書かれている。

②「Exploration in the Japanese Alps, 1891-1894」についての検討会中のガウランドの発言

1895年12月9日の英国地学協会の例会において、ウェストンが滞日中の登山実績を報告した。その後の検討会でガウランドの発言が記録されている。1873年の2年後にエドワード・ディロンと立山に登ったこと、立山の硫気孔が他とくらべてとりわけ強度の鉱水であること、槍ヶ岳、爺岳、五六岳、乗鞍岳の初めての登山者が自分であることなどを発言している。

③サトウ日記の芦峯寺での記録

先述したサトウ日記の1878年7月26日に「ディランやガウランドが数年前来た時に話してきかせたインギリス（イギリス）の首都ドンドル（ロンドン）の話をたくさんしてくれた。」との記録がある。

④高山町旅行外国人宿泊関係文書（明治九年～同十七年）

高山市教育委員会所有の「高山町旅行外国人宿泊関係文書（明治九年～同十七年）」は明治9年（1876）～明治17年（1884）までの9年間に高山町に宿泊した外国人旅行者関係の文書をまとめたものであり、そこにディロンとガウランドの旅行免状の写しが綴られている。それによると明治10年（1877）7月ガウランドとディロンの二人が、地質風土查明（調査）のため、現在の新潟県・長野県を経て飛騨地方へ入り、近江・大和・紀州を廻って帰阪したとされる。7月19日に高山で宿泊していると高山町戸長が岐阜県権令（知事）に報告している。

ガウランドが立山を訪れ得た、山の高度や岩石についての情報をサトウが『日本旅行案内』に生かしたことは序文と①～④から想像できる。ルート34で掲載されている山の名前や高さはミルンの①と一致。ガウランドが立山を訪れた時期については複数説があり、②だとすれば明治8年（1875）ということになるが、三井嘉雄氏は『丹生川村史』⁽⁶⁶⁾の資料や④をもとに明治10年（1877）と考証している。

R・W・アトキンソン(1850～1929)

〈アトキンソン略歴〉

ロバート・ウィリアム・アトキンソンは1850年にイギリスのニューキャッスルで生まれ、英国化学学校および英国鉱山学校で学び、明治7年(1874)に日本のお雇い教師(化学)として東京開成学校に赴任した。日本酒醸造についての最初のまとまった科学的研究や、染料としての藍の研究を行った。また日本古来の青銅鏡についての研究もした。明治12年(1879)の夏、工部省のお雇い外国人だったウィリアム・グレイ・ディクソンと東京大学の学生だった中沢岩太と甲斐・信濃・飛騨・加賀・越中の各地を歩き、八ヶ岳・白山・立山に登った。明治14年(1881)にイギリスへ帰り、帰国後はウェールズに事務所を設け、技術の顧問として炭坑や鉄鋼業者のために働いた。1929年に79歳で亡くなった。

〈アトキンソンの立山登山〉

アトキンソンは明治12年(1879)の7月16日から8月15日にかけて信州・飛騨・越中方面に旅に出て、その紀行を「YATSU-GA-TAKE,HAKU-SAN,AND TATE-YAMA.」と題して翌年の『The transactions of the Asiatic Society of Japan』に発表している⁽⁶⁷⁾。立山に関する部分は渡辺英時雄が訳出しており⁽⁶⁸⁾、アトキンソンの立山に関する記述をまとめてみる。

【行程】

7月16日に東京を出発し、川越—栃本—海尻—木沢温泉—伊那部—木曾福島—御母衣—白山—牛首—鶴来—金沢—津幡—石動—高岡—小杉と進む。

〔8月7日〕神通川の舟橋を渡り、平井屋旅館に宿泊

〔8月8日〕常願寺川沿いにさかのぼり、上滝から原村へ

〔8月9日〕籠の渡しで川を渡り(真川と湯川の合流地点付近か)、立山温泉へ

〔8月10日〕松尾峠を通り鏡石を経て室堂、地獄谷へ

〔8月11日〕雄山に登頂し黒部へ

〔8月12日〕針の木峠を越えて大町へ

【立山や富山に関する記述】

真川と湯川「流れを横切るために“籠の渡し”という装置が設けられているのである。この装置の名前には一種の空想的な響きがあるが、我々としてもその名を聞いて少なからず興奮したものだ。というのも、原村でも言われたことだが、この渡しの装置は、籠の中に何か一つのものしか乗せて運べないという。その呼び名はまさに、狭くて兩岸がそびえ立った峡谷の姿を彷彿とさせる。川面高くに綱が渡され、行き来する籠が不安定に揺れながらぶら下がっているという姿である。だが、この場所に来て一目見たとき、そんな空想的な思いは消えていた。川面から8フィート(※2.4384m)か10フィート(※3.048m)上に綱が渡され、両側は岩にしっかりと結び付けられている。綱には、よく山で使われる籠がぶら下がっており、その綱を伝って対岸から対岸へと籠を運ぶのである。」

多枝原谷「川床に散在する巨大な岩—これには、川の流れの力によって垂直に大きな割れ目ができている。また、雷鳴のような音を響かせながら大きな石を流し運ぶ水流—これらがすべて重なり合って、多枝原谷の壮観さを生み出している。」「巨大な岩石が累々と重なった広いところがあったが、これは1858年の大地震でできたもので、片側の山の半分ほどが崩れたのだという。」

立山温泉「ここはよく繁盛しているようだが、宿や浴場のどちらを見ても、貧相である。」

室堂「室堂の状態は、白山のよりもひどいものだった。すきま風が自由に中を吹き抜けるし、寝床も粗末、ましてや粗朶を燃やす煙はそれ以上にひどかった。」「巡礼登山者の数が白山よりもずっと大いにもかかわらず、その施設、待遇の貧弱なことは驚くべきことである。」「夜の冷たい風を防ぐのに寝床となる篋を戸に当

てがい、それを手で押さえているほかなかったのである。」

地獄谷「我々は有名な噴気孔を見学に行くことにした。この噴気孔は小屋から6町ほど離れた谷あいにある。室堂を出て左手の方へ行くと、二つの池の間を通る。一つはなだらかな斜面にある浅い池、もう一つの左側にある池は切り立った縁を持ち、水の色もかなり濃い緑色をしている。これはおそらくナウマン氏が論じているように、旧火口の一つと思われる。その池の間を過ぎて先へ行くと、丘陵の崖っぷちに出た。晴れた日なら、ここから噴気孔一体の鳥瞰が得られることだろう。その石ころだらけの崖を下っていくと、柔らかなぬかるみ状の谷底に達した。そこは、適当な距離をおいて、浅黄色の小丘が2つ3つできている。」「近寄ってよく見ると、それは白っぽい岩石、たぶん変質した花崗岩と硫黄とが混ざりあった状態のものであることがわかった。」「噴気孔の一つは恐ろしいほどの音を立てており、その勢いは噴気孔から10~15メートルも離れた所に硫黄の塊を付着させているほどである。これらの噴気孔がシューシューと音を立てている様子を見ているうちに、この勢いを利用すれば、何か大きな動力が得られるのではないかと思われた。」

雄山 (途中)「室堂から860フィート(※262.128m)登った所にある第一の神社をすぎてからは、困難な登りになる。この第一の神社は最高点の御本社と浄土山とを結ぶ稜線上の平坦地にある。第二の神社(室堂からの高さ1,050フィート(※320.04m))からの山々の眺めはすばらしく、北西の方向に伸びた能登半島や日本海までが目に入った。しかも、我々がこの地域に入ってから初めての富士山の姿を見ることができたのである。」「この上には非常に美しい社殿がある。この稜線から頂を見上げれば、なぜここに立山(そびえ立つ頂の意)という名が冠せられたかわかるというものだ。他のどの山よりも高く、その肩から上の頂をのぞかせて、船人にはいい目印になっている。一回の休みもとらずに登り続けたが、ちょうど一時間かかった。」

雄山 (頂上)「白山からの眺めも素晴らしかったが、立山の頂上からの眺めそれをはるかにしのぐものだった。朝の好天に恵まれ、あらゆる地点を簡単に見分けることができた。この立山とは反対側の海に近いところにある美しい円錐形の富士山に至るまで、次から次へと連なる山波のうねり、そのどの一つをも極めてはっきりとした姿で目にすることができたのである。」「巡礼者たちはしばらくの間神官と話をしているが、その間にも要領の大意が何回も伝えられる。そして神官は社殿の前にひざまづいて腰を低くし、巡礼者たちも神官を取り巻くように膝をついて、祈りがささげられる。その祈りのなかには、タテヤマとかイシカワという名が何度も繰り返されていた。神官が手を打ち、そのあと“南無阿弥陀仏”と大きな声で唱えて祈りを終えると、熱心な信者のほとんどが“ありがとう”と言う。それから神官は立ち上がり、信者への説教を行ない、伊弉冉、伊弉諾の話聞かせる。そのあと神官は様々な聖宝—たとえば槍の穂先、剣、各種の硬貨や鏡など—を持ち出してくる。信者たちはそれを見て感嘆の声を発し、十分な満足感を味わうのである。」「そして巡礼者たちが立ち去るとき、お米とお神酒が振りまかれるのだが、これはあらかじめ祈禱料として渡しておいたものである。儀式そのものは、まるで仏教と神道が典型的に混淆したもののようであった。巡礼の人びとは常に“南無阿弥陀仏”と唱和しているのであるが、口の中でもごもご唱えているので、その音は“ナム”のようにしか聞こえない。」

【ディクソンの見た立山】

アトキンソンとともに旅したウィリアム・グレイ・ディクソンは1854年にスコットランド、グラスゴー近郊のベイズリーに生まれた。明治9年(1876)に日本政府に招かれて来日し、工学寮英語教師として明治13年(1880)まで在職した。イギリスに帰国後、『The Land of the Morning』⁽⁶⁹⁾を著し、その中で立山を含む日本の山を紹介し、ディクソン自ら「THE SUMMIT OF TATE-YAMA WITH YARI-GA-TAKE IN THE DISTANCE」と題して雄山山頂をスケッチしている⁽⁷⁰⁾。長老派教会牧師として、オーストラリア、ニュージーランドで布教。1928年にニュージーランドのダニーデンで亡くなった。立山での行程は基本的にアトキンソンと同様である。先述のアトキンソンの発表後のディスカッションにおいてディクソンが立山について話している。

多枝原谷「最近ある日本人から聞いたところによると、私たちが通過した多枝原谷は日本人の間でも、日本

の全体的に柔らかく絵のように美しい風景の中で特筆すべき荒涼としたもので見応えがあるとされている。溪谷の上にそびえ立つ荘厳な断崖には鋭角的な岩が続いているので、恐ろしい鬼が住むとされ鬼ヶ島（悪魔の城）という名前がつけられている。」

針の木峠「この針の木峠周辺には一つの悲劇が語り継がれている。太閤時代の佐々成政の話で、彼は信州から敵の手を逃れる途中ここで飢えたため一族もろとも非業の死を遂げたというのである。」

D・H・マーシャルとE・ダイバース(1837～1912)

〈マーシャル略歴〉

イギリス出身のデイヴィット・ヘンリー・マーシャルは明治6年(1873)から明治14年(1881)まで工部大学校で数学と物理を教えた。明治8年(1875)に日本アジア協会に所属し、活発に研究活動をした人で、発表論文の中には日本の地理に関するものが見受けられる。「Notes on some of the Volcanic Mountains in Japan」⁽⁷¹⁾では立山はとても高い火山だが現在は休眠火山であると書かれている。帰国後、ダブリン大学で特別講義を行い、のちカナダのキングストンにあるクィーンズ大学で物理学を教え名誉教授に推された。

〈ダイバース略歴〉

エドワード・ダイバースは1837年11月ロンドンに生まれた。専攻は化学であったが、医学も修め、1870年にはミドルセックスホスピタルメディカルスクールで法医学の講座を担当した。明治6年(1873)に工部大学校の教師となり、化学を担当したほか、明治15年(1882)には同校の教頭となって学校行政にも携わった。日本における無機化学研究の基礎を作り、タカジアスターゼの高峰讓吉や下瀬火薬の下瀬雅允は門下生である⁽⁷²⁾。明治32年(1899)まで日本に滞在し帰国。1912年にロンドンで亡くなった。

〈マーシャルとダイバースの有峰訪問〉

ガウランドの箇所では取り上げた高山市教育委員会所有の「高山町旅行外国人宿泊関係文書(明治九年～同十七年)」にマーシャルとダイバースが明治12年(1879)7月から8月に松本・飛騨・富山にかけて旅行する旨を記した旅行免状の写しが残っている。また、先述したアトキンソンの発表後のディスカッションにおいて、ディクソンに続いてマーシャルも発言しており、ダイバースとともに有峰へ訪れたことを報告している⁽⁷³⁾。

【有峰に関する記述】

「横浜のヘラルド社の記者が去年、立山の麓の温泉で聞いた話だが、この村には非常に排他的な人々が住んでいて、よその土地の人々とはいろいろな取引もせず、お金の使い方も知らないようだ。住人同士の近親結婚が多いせいか、人々の容姿が似ており、また知識も低いという。この種の話は、高原川溪谷の東茂住で鉱山を経営する一見知識のありそうな人からも聞いた。それによるとこの土地の住民は全く風変わりで、よそ者とは話もしなければ食料もわけてやらないらしい。性格は極端に鈍く、風貌がよく似ているというのだ。」
 「有峰の村には13軒の住居があり、いずれも美しい緑の高台に散在している。」「私の見たところでは村の人の様子は普通の集落の人のそれと殆ど変わりはない。彼らは訪問者にとっても礼儀正しいが、食料については、予想していたように譲ってくれる余裕はないと言っていた。しかしながら食料を持参していると説明すると、村長は安心して我々をその家に泊めてくれた。各地では少なくとも一頭の馬を大切に飼っていた。家や神社には馬の絵が奉納されていて大事にされているとの印象を受けた。泊めてくれた家の主人は、寝具がないので粗末なむしろを敷き、木の枕で寝てもらうしかないと言っていた。」「翌朝、出発する前に、村民の全部が私たちを見にやってきた。男、女、子供、彼らの誰を見ても痴呆じみた容姿は認められなかった。また、顔つきが似ているということもなかった。そして、品物の交換とかお金の使い方もわきまえていた。」「村民は総じて非常に貧しいが、幸福そうな生活をしており、外国人を見たのは私たちが最初であったにもかかわら

ず、子供たちですら怖がらず、バスケットを差し出すと受け取ってくれた。」

おわりに

明治初期に立山へ訪れたイギリス人の記録をみると、彼らの立山登山はアルピニズムであり、調査研究目的でもあったことがわかる。彼らは立山の自然や山に登ること自体を楽しみながら、動植物や地質、文化や歴史について幅広く記録している。記録からは、明治初期の立山の自然環境、山頂での宗教儀礼、当時の暮らしなどを窺い知る上で有用な情報が記されており、明治初期の立山の地理、社会状況の理解に新たな手掛かりを与えてくれる。

さらに、外国人の眼差しが示されている点にも注目したい。旅行ガイドブックは不特定多数の人にその地域の魅力を伝え、実際の場所へ誘うという目的を持つ。そこには読み手が求めている情報、筆者が旅行者に伝えたい情報が記載される。外国人向け旅行ガイドブックである『日本旅行案内』には、明治初期のイギリス人を含む外国人が、魅力を感じ、見るに値した立山の自然、歴史、文化について書かれている。

本稿では、西洋における近代登山の成立について考察し、『日本旅行案内』の記述をもとに、情報提供者たちの日記や紀要にあたり、立山に訪れたイギリス人の足跡、記述をまとめた。現在、立山博物館は立山への文化観光拠点として複数の事業に取り組み、立山の魅力を発信し、国内外から多くの人に博物館へも足を運んでもらうことを目指している⁽⁷⁴⁾。目下、令和6年度の事業の1つとして、英語版WEBサイトの制作を進めている。「外国人から見た立山の魅力とは何か」の眼差しを持ち、内容、構成を検討中である。今後ますます増えると予想される外国人旅行者に対して、立山の魅力を伝えるべく、引き続き立山における外国人登山に関する調査を継続していきたい。

【註】

- (1) 2版の総頁数は705頁であり、序説を除くと586頁が各ルートのご案内となっている。
- (2) 1872年に、日本や他のアジア諸国に関する事柄についての情報を収集し、出版するという目的で横浜在留の外国人によって設立された学術団体。
- (3) 市立大町山岳博物館常設展「北アルプスの自然と人」展示解説書（市立大町山岳博物館、2014年3月29日刊）。同書の58頁には、山に登ること自体を目的とした登山であり、地元住民による狩猟や薬草・鉱物採集、博物学者などの調査研究や職務として仕事、あるいは信仰を目的とした、それまでの登山とは一線を画すものを近代登山と説明している。
- (4) 布川欣一『目で見る日本登山史』（山と溪谷社、2005年刊）、69頁。
- (5) 庄田元男『異人たちの日本アルプス』（日本山書の会、1990年刊）、6頁。
- (6) Coolidge, W.A.B (1904). Josias Simler et les origines de l'Alpinisme jusqu'en 1600. Grenoble : Allier frères
- (7) Gribble, Francis. Henry (1899). The Early Mountaineers. T. F. Unwin
- (8) 註6、前掲書75頁～78頁。
- (9) 註6、前掲書672頁～674頁。
- (10) 註6、前掲書678頁～682頁。
- (11) 註6、前掲書682頁。
- (12) 註6、前掲書684頁。
- (13) 註6、前掲書684頁。
- (14) 註6、前掲書686頁。
- (15) 註6、前掲書688頁～692頁。
- (16) 『山岳 第3巻 山の芸術』（朋文堂、1958年刊）、42頁より引用。
- (17) 註7、前掲書43頁～45頁。
- (18) 小泉武栄『登山の誕生』（中公新書、2001年刊）、43頁～45頁。

- (19) 註18、前掲書21頁。
- (20) 註6、前掲書692頁～710頁。註7、前掲書18頁～24頁。
- (21) 註6、前掲書714頁～728頁。
- (22) 註6、前掲書728頁～730頁。
- (23) 註6、前掲書746頁～768頁。
- (24) 西村三郎『文明の中の博物誌—西欧と日本—上』（紀伊國屋書店、1999年刊）、260頁。
- (25) 註7、前掲書69頁。
- (26) Scheuchzer, Johann.Jakob (1706). Beschreibung der Natur-Geschichten des Schweizerlands. Zürich : In Verlegung des authoris
- (27) Scheuchzer, Johann.Jakob (1723). Ouresiphóites Helveticus, sive itinera per Helvetiæ alpinas regiones facta annis MDCCII. MDCCIII. MDCCIV. MDCCV. MDCCVI. MDCCVII. MDCCIX. MDCCX. MDCCCXI. Lugduni Batavorum : Typis ac sumptibus P. vander Aa
- (28) Martel, Peter (1744). An account of the glaciers or ice Alps in Savoy : In two letters, one from an English gentleman to his friend at Geneva; the other from Peter Martel, engineer, to the said English gentleman. London : P. Martel
- (29) 信州大学附属図書館。“書物で繙く登山の歴史1—ヨーロッパ近代登山と日本—(1)”。<https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/matsumoto/find/tenjikotani1-01.html>, (参照 2024-12-28)
- (30) Horace-Bénédict de Saussure (1786-1796). Voyages dans les Alpes, précédés d'un essai sur l'histoire naturelle des environs de Geneve. Genève : Chez Barde, Manget & comp
- (31) モンブランの初登頂は、1786年8月8日、モンブラン登山の玄関口であるシャモニー出身のジャック＝バルマ（1762～1834）とミシェル＝ガブリエル＝パカール（1757～1827）によって遂げられた。この登山はソシュールの懸賞に応じたものであった。
- (32) Forbes,J.D (1843). Travels through the Alps of Savoy and other parts of the pennine Chain : with observations on the phenomena of Glaciers. Edinburgh : Adam and Charles Black
- (33) ピアーズ・ブレンドン、石井昭夫訳『トマス・クック物語—近代ツーリズムの創始者—』（1995年刊）の27頁において、グランドツアーはもともとエリザベス女王の時代に、教育の洗練された形態として、「国民に古典時代の国々を実体験させることによって貴族教育の仕上げをする」べく始められたものと説明されている。18世紀が深まるにつれグランドツアーに出る人は増加していき、18世紀の終わりごろには常時4万人くらいの英国人が大陸に滞在していたとされる。
- (34) 河村英和『観光大国スイスの誕生—「辺境」から「崇高なる美の国」へ』（平凡社、2013年刊）、18頁。
- (35) 註34、前掲書19頁。
- (36) 註34、前掲書20頁。
- (37) 註34、前掲書50頁。
- (38) 市立大町山岳博物館 ユングフラウ鉄道全線開通100周年記念 スイス政府観光局・市立大町山岳博物館共同企画展「スイス山岳観光の黄金期と日本人—その魅力と文化を伝えた人々—」展示解説書（市立大町山岳博物館、2012年7月14日刊）。
- (39) 註34、前掲書によるとクックのスイス旅行のコースは、ルソー所縁の地と、氷河、滝、湖、2つの高山をめぐるというものだった。
- (40) ジェッフリー・ヒンドレイ著、近藤等訳『図説 探検の世界史4 世界の屋根に挑む』（集英社、1975年刊）。
- (41) Alcook Rutherford (1863). The capital of the Tycoon. Longman,Green,Long
- (42) 富士山かぐや姫ミュージアム、リニューアル1周年記念展「富士登山列伝 頂に挑むということ」展示解説書（富士山かぐや姫ミュージアム、2017年6月3日刊）。
- (43) 註4、前掲書36頁。
- (44) 異人登山に富岳の怒り（仮）. Digital Cultural Heritage
<https://dch.iii.u-tokyo.ac.jp/item/5c0a0eff-c82b-4838-8856-9066fd3abbf6/> (参照 2025-01-04)
- (45) 註4、前掲書39頁。
- (46) 外国人科学者の山岳調査と観測については、註4の36頁～37頁にまとめられている。
- (47) 註34、前掲書第1章。

- (48) 横浜開港資料館「世界漫遊家たちのニッポン—日記と旅行記とガイドブック」展示解説書（横浜開港資料館、1996年7月31日刊）。
- (49) ジュール・ヴェルヌ著、川島忠之助訳『新説 八十日間世界一周』（慶応義塾出版社、1880年刊）。
- (50) 註48、前掲書18頁。
- (51) 寺本敬子「1878年パリ博覧会における前田正名の役割—ジャポニズム流行の立役者—」（佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』所収、思文閣出版、2015年刊）。
- (52) 外国人は開港された5港（横浜・函館・神戸・長崎・新潟）の開港場とその周辺の遊歩区域外へは立ち入ることができず、また開港場と開市場（東京・大阪）以外で貿易活動に従事することはできなかった。A・G・S・ホースが作成した「横浜周辺外国人遊歩区域図」（1867年）では、地図中に赤線で遊歩区域の境界が示されている。
- (53) 丸山宏「近代ツーリズムの黎明—「内地旅行」をめぐって—」（吉田光邦編『19世紀日本の情報と社会変動』京都大学人文科学研究所、1985年刊）に詳しい。
- (54) 註53、前掲書108頁。
- (55) 註53、前掲書110頁。
- (56) 註5、前掲書14頁。
- (57) Japanese Alpsの提唱者は大阪造幣局に勤務したウィリアム・ガウランドであるが、活字になったのは『日本旅行案内』のこの箇所が初めてとされる。
- (58) ここでいう「Shindō (New Road)」は、大町市野口から針の木峠、黒部川、ザラ峠、立山温泉を経て富山市原に至る全長20里18町、巾員2間の信越連帯新道のこと。民間資本により着工され、部分的に竣工して通行可能となった区間はあったが完成は見なかった。信越連帯新道については、富山県立山カルデラ砂防博物館第17回企画展「異人たちが訪れた立山カルデラ—立山新道と外国人登山—」展示解説書（富山県立山カルデラ砂防博物館、2006年7月20日刊）で詳しくまとめられている。
- (59) 横浜開港資料館『図説 アーネスト・サトウ—幕末維新の外交官—』（横浜開港資料館、2000年刊）。
- (60) アーネスト・サトウ著、坂田精一訳『外交官の見た明治維新』（岩波書店、1960年刊）。
- (61) 秀島成忠編『佐賀藩海軍史』（知新会、1917年刊）。
- (62) 福沢都茂子翻訳「英国公使館書記官アーネスト・サトウの立山登山日記—「アーネスト・サトウの日記」—より」（『富山県史だより3』所収、富山県史編さん班、1978年刊）。
- (63) 庄田元男『日本旅行日記1』（平凡社、1992年刊）。
- (64) 『The transactions of the Asiatic Society of Japan』9, Asiatic Society of Japan, 1964-09.
- (65) "Exploration in the Japanese Alps, 1891-1894: Discussion", The Geographical Journal, Vol. 7, No. 2 (Feb, 1896) , pp. 146-149, <https://www.jstor.org/stable/1773724>
- (66) 『丹生川村史』（大野郡丹生川村史編纂委員会、1962年刊）、1212頁。
- (67) 『The transactions of the Asiatic Society of Japan』8, Asiatic Society of Japan, 1964-09.
- (68) 渡辺美時雄訳「明治12年、お雇い外国人の『八ヶ岳・白山・立山』紀行」（『山と溪谷』562号所収、山と溪谷社、1983年刊）、247～253頁。
- (69) Dixon, William Gray (1882) The Land of the Morning : an account of Japan and its people, based on a four years' residence in that country, including travels into the remotest parts of the interior. Edinburgh : J. Gemmell
- (70) 註69、前掲書655頁。
- (71) 『The transactions of the Asiatic Society of Japan』6, Asiatic Society of Japan, 1964-09.
- (72) 手塚竜磨『英学史の周辺』（吾妻出版、1968年刊）、10頁。
- (73) 高成玲子「アーネスト・サトウ『日本旅行記』と『日本旅行案内』—D. H マーシャル、E. ダイバーズの「有峰訪問記」をめぐって—」（『大山の歴史と民俗』第8号所収、大山町歴史民俗研究会、2005年刊）。
- (74) 「立山博物館を中核とした文化観光拠点計画」については、『富山県立山博物館』年報・第33号の2頁において、要点や取り組みがまとめられている。